

創る人と 支える人

鉛筆画 **大森浩平展**

福岡県社会福祉士会
県民向け福祉セミナー

8月
30日

九州芸文館
筑後市津島 1131

創作者と伴走者に見る「支援のカタチ」とは

えっ これ鉛筆画？



UNTITLED '17

人と会うことは苦手ではないのですが、一つずつじっくりかみ砕いて修得しないと進められないため、学校生活に**適応**するのが苦手だったのかもしれない。

県民向け福祉セミナーとは、福岡県社会福祉士の活動を県民の方にも知っていただくことを目的に、年1回開催しているものです。

今年度は、鉛筆で精緻な世界を描き出す作家大森浩平さんの「鉛筆画 大森浩平展」の会場で大森さんのお話と創作活動を支援してきた瀬戸内市立美術館前館長の岸本員臣さんに「創作活動とその支援」をテーマにお話しいただきます。講演後は、作者によるギャラリートークも開催します。

鉛筆一本で「本物以上に本物らしい」世界を描き出す大森浩平さん。その作品が放つ圧倒的な実在感の裏側には、自身の特性との葛藤、そして「創作すること」をあきらめかけた絶望と再生の物語があります。

大森さんは子どものころから恐竜や昆虫図鑑の模写や細部を書き込むことにやりがいを感じ、自分の得意分野を自覚しました。しかし、成長とともに、大森さんは自身の「神経質さ」に直面するようになります。一つのことに過剰に集中し、納得がいくまで

噛み砕かなければ前に進めない特性は、集団生活の中で負担となっていきました。

複数の課題を並行してこなす普通科高校のシステムに限界を感じ、通信制へ編入。その後進路を考えたときに得意なものを生かすために地元大学のデザイン学部に進学しますが、やはり「器用にそつなくこなす」ことが求められる環境に馴染めず、休学の後に中退を選択します。

280 時間かけ鉛筆で描いたボルト。今思えばちょっとどうかしてた。

2017 年、23 歳の大森さんは「一生に一枚のものを」という覚悟で、一本のボルトとナットを描き始めます。

制作時間は計 280 時間。金属の光沢、目に見えないほどの小傷、水滴。お姉さんが SNS に投稿した制作過程の画像によって鉛筆一本で「自分の存在価値」を感じ、頑張る方向性が見えました。

鉛筆画を描く人生は一旦終わりにします (しました)。神経質さを逆手に取って描き続けた結果、神経質をより助長し、強迫性障害 (確認強迫) が悪化してしまったので。

しかし、創作の源泉であった「徹底したこだわり」は、次第に彼の精神を蝕んでいきます。完璧を求めるあまり神経質さが加速し、確認強迫の症状が悪化。2022 年には「鉛筆画と縁を切れれば楽になれるかもしれない」。作品を燃やそうとまで思い詰めた

彼は、SNS で筆を置くことを宣言しました。才能が自分自身を壊してしまう、痛切な決断でした。

一度は閉ざされた鉛筆画家の道。それを再び開いたのは、地元・岡山県の瀬戸内市立美術館、岸本館長との出会いでした。

描くことに限界を迎えた作家の叫びに、美術館館長はどう応えたのか？
その答えは会場でご確認ください。

講師略歴

おもりこうへい

大森 浩平

1994 年：岡山県岡山市生まれ

2016 年：岡山県立大学デザイン学部 中退

2019 年：超絶の世界展 (瀬戸内市立美術館 / 岡山)

2024 年：鉛筆画 大森浩平展 (瀬戸内市立美術館 / 岡山)

2024 年：大森浩平 鉛筆画展 (福山天満屋 / 広島)

2025 年：鉛筆画 大森浩平展 (長島美術館 / 鹿児島)

2026 年：大森浩平 鉛筆画展 (今井美術館 / 島根)

きしもとかずおみ

岸本 員臣

1949 年：岡山県岡山市生まれ

1973 年：岡山大学法文学部卒業後、

岡山市に本社を置く百貨店「天満屋」に入社以来 37 年間、美術畑一筋で勤務

2010 年：瀬戸内市立美術館の初代館長に 60 歳で就任

2025 年：瀬戸内市立美術館の館長を退任

現在：大森浩平展実行委員会事務所 心星 代表

募集要項

■開催日時：8月30日 (日)
13:30~15:00

第1部：講演「創作活動とその支援」

【講師】大森浩平氏 (作家) ×

岸本員臣氏 (前瀬戸内市立美術館館長)

第2部：大森浩平氏によるギャラリートーク

■開催場所：九州芸文館 (筑後市津島 1131)

九州新幹線筑後船小屋駅下車 (徒歩約 1 分)

JR 鹿児島本線筑後船小屋駅下車 (徒歩約 1 分)

駐車場有。2 時間まで無料

■定員：80 名

■参加費：無料 (セミナー参加者は入館料も無料)

■申込・締切：8月16日 (日) まで

に右記の QR コード

または

<https://x.gd/Bq2jd>

からお申込ください

